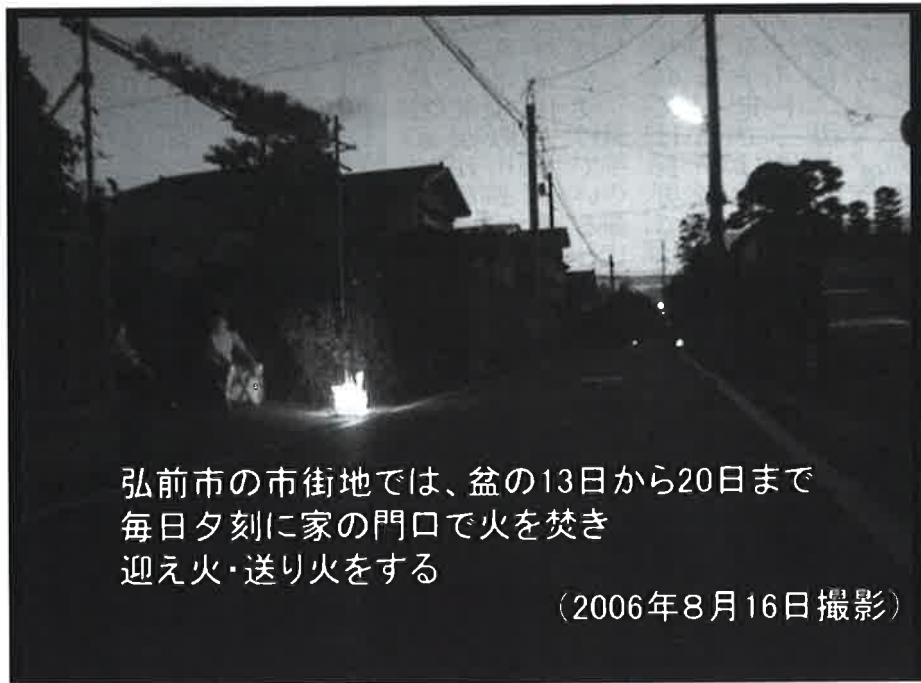


今年3月に『通史編』3冊を刊行し、全36巻完結となった『青森県史』だが、実はその編さん事業が始まったのは1996（平成8）年、20年以上前にさかのぼる。

この20年の間にも、私た

ちをとりまく環境は大いに変わってきた。例えば、気軽に片手で持つて撮影できる家庭用のビデオカメラが普及したのは1990年代のことだという。映像による記録には、文字資料や写真資料ではとり



弘前市の市街地では、盆の13日から20日まで毎日夕刻に家の門口で火を焚き迎え火・送り火をする

(2006年8月16日撮影)

DVD収録映像作品「ホトケ様を迎えるあかり」より
(撮影：大村達郎・小山隆秀・村中健大、編集：村中健大)

こぼしがちな情報が多く含まれる。県史調査でも早くからビデオカメラを取り入れ、民俗分野では、県内各地での調査の際に、事務局が自らビデオカメラを構えて撮影してきた。そのテープは200本を越える。来年には元号が変わるということを踏まえれば、青森県の平成という時代における風習・風俗の記録であり、未来の歴史資料といつて過

ももちろん、プロが演出撮影し、編集した映像作品には及ばないところがあるだろう。しかし、飽きずに見ていただけるよう2〜3分の短編に留めたり、字幕を追加したりといった工夫を随所にこらした。その一方で、BGMなどの演出は控えて、映像記録資料としての価値を損なわないよう配慮している。

今回はそのなかから、この季節にぴったりの

ホトケ様を迎えるあかり

—『青森県史通史編3』

付録DVDより—

福島春那

(県民生活文化課
県史編さんグループ嘱託員)

言ではないだろう。

こうした調査は県民の皆様の協力なくしては成り立たなかった。その成果を皆様に還元すべく、『青森県史 通史編3 近現代 民俗』には11本の映像作品を盛り込んだ付録DVDを添付している。

先に述べた県史調査にて撮影した映像を、委員や事務局みずから編集し、短編の映像作品へと仕上げた。

下北では夜ごと墓前でろうそくを灯すという家が多い。映像では、下北郡大間町大間の夜の墓所で花火をする様子を収めた。

津軽平野南部では、盆の期間、毎日夕方に家の門口で火を焚く家が多い。これはいまでもよく見られる光景である。日暮れの頃、家ごとに焚かれる火が沿道に沿って並ぶところなどは、弘前市周辺をふるさととする人達にとって郷愁を呼ぶ光景のひとつだろう。

映像作品として収録したこうした光景を、特別なものではないと感じる方もいるかもしれない。しかし、私たちの身近にあふれているものこそ、私たちの歴史を語るための貴重な資料となりうるのだ。身近な時代を扱った『青森県史通史編3 近現代 民俗』だからこそ、そのことを感じていただけるのではないかと、編集に携わったものの一人として期待している。是非、多くの方にご覧いただきたい。